

第8回西成特区構想有識者座談会 議事録

日 時 平成24年8月10日（金）午後1時00分～午後3時05分

場 所 西成区役所 4階会議室

○事務局 大変長らくお待たせいたしました。

ただいまから、第8回の西成特区構想有識者座談会を始めさせていただきます。

始めにちょっとだけ臣永区長よりごあいさついただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

○臣永区長 皆さん、こんにちは。

区長の臣永でございます。前回、第2部のほうは欠席をさせていただいたんですけども、市役所のほうで区長会がありまして、やむなく途中で退席させていただきました。どうも申し訳ありませんでした。一言申し上げておきます。

○事務局 それでは先生方、早速、議論を進めていただきます。

座長の鈴木先生、どうぞよろしく願いいたします。

○鈴木座長 どうぞよろしく願いいたします。

今日は、事前に予定していた回じゃなくて、臨時の回でございまして、それにもかかわらずご出席をいただきまして、大変ありがとうございます。感謝を申し上げたいと思います。

今日のテーマでございますけれども、そもそもは前回、7月27日に本当はやろうと思っていたんですが、大きな需要創出策という中の一環としての子育て支援のあり方、教育問題、教育振興策についてということでの議論の続きをしたいというふうに思っております。

前回はむしろ、こどもの里の問題ですとか、あるいは、小・中学校の子どもを守るためのネットワークをどうするかというお話、これ、大変重要なお話でございまして、前回、予定をしておりますよりも、もう少し長く議論をしたほうがいだろうという判断をさせていただきます。途中でほかのテーマを打ち切りまして、その議論を続けましたが、今日はその続きで、どちらかといいますと、足元の教育のいろんな問題というよりは、もう少し、将来に向けての、未来の話ですね。教育産業をどうするかというような話を中心に

お話をさせていただこうと思っております。

今日の段取りでございますけれども、まず、私のほうから、大学の誘致についてということをお話をさせていただきます。それから、大規模留学生会館の設置についてという話をいたします。そして、このあたりで1回、とめまして、少し議論をさせていただこうというふうに思います。その後、保育の話は前回、全くやりませんでしたので、保育施策、それから、子育て世帯の流入策ということで、これが実はそもそも、橋下市長の一番大きな問題意識で、西成区に子どもをたくさん流入させたいと、子どもの声ができるようなまちにしたいというのがそもそもの目的だったわけですので、この話について、少しまた、私のほうから、ご報告させていただいて議論をしたいと思っております。

そして、最後でございますけれども、これ、前回、ちょっと中途半端な形で終わったんですが、小・中学校の統合の問題について、少し長めに議論をさせていただいて、前回はどちらかというところ、この税金に払えるようにしようという象徴的な言葉がございましたけれども、どちらかといえば、生活力をつけるというようなことがこの西成の教育の1つの目標になるんじゃないかという話がありましたが、それ以外にも、実は西成は非常にいろんな芸術面でも、スポーツの面でもリソースがあつたりしますので、そういう意味でもっと、この西成の教育を活性化するというか、魅力あるものにするためにはどうすればいいかというような話を今中と萩小の統合問題に限らず、もっと西成区全体の話として少し広げていきたいというような、そういうような4つくらいのテーマを話し合うつもりで思っております。2時間ほどでございますけれども、おつき合いいただければ幸いです。

それでは早速大学の誘致についてということでご報告をさせていただきます。

西成特区として大学を誘致しようという話につきましては、もう既に、最初の段階の、つまり、24年度のかかなり初めのほうから、各局が出してきた案の中に入っているんですが、その後、全く具体的な話にはなっていないようですので、それについてちょっと考えてみたということでございます。

まず、問題意識ですね。何で大学誘致する必要があるんだという話なんですけど、まず、西成区、もしくはその隣接地域への大学誘致というのは、私は対費用効果、あるいは、地域への波及効果の面で非常に大きい施策だと、そして、これは目の前の問題を解決するというわけではありませんけれども、将来に向けての西成区はどういうふうなもので活性化するかという意味で非常にポテンシャルの高い産業だというふうに考えております。

まず、第1に、大学生というのは、経済的には消費だけをするという、珍しい消費主体という、経済学の言葉ですけど、消費主体であって、住宅需要、下宿とかアパートとか、それから、飲食などの消費需要、それから、当然、彼らの娯楽がありますので、娯楽等の消費を生み出すわけですね。これは、この地域、特に、あいりん地域でございますけれども、今後、急速に、あいりんだけじゃないですよ、ごめんなさい、生活保護という意味では、西成区全体に広がってますので、高齢化とともに、急速に需要が失われていくわけですね。生活保護の需要というのが、具体的にはお亡くなりになるということですけども、お亡くなりになって、急速に需要が減っていく中でそれにかわる1つの大きな需要創出になるというふうに考えます。

第2に、これはあいりんの話でございますけれども、日雇い労働者の住宅需要、消費需要を満たすというのが、あいりんというか、釜ヶ崎のまちの基本的な構造で、外からの需要を支えるというようなそういう産業形態をとっておるわけですけども、実はこれはお客さんが日雇い労働者から学生にかわるということで、ほぼ、ほとんどそのすぐ切りかわれると、切りかわりやすいという意味で、親和性が高いと言っておりますけれども、親和性が高いというふうに考えます。全く違う産業に、全く違うビジネスに転換しなくても、同じような方法で学生街への適応ということは可能であろうというふうに思います。

そして、第3に、文教地区になるということによるまちのイメージアップは非常に大きいというふうに思います。それから、小中一貫校ですとか、西成区のほかの学校についても、身近に、目の前にゴールがあるというか、目標があるということによってモチベーションが非常に高くなると思いますので、そういう意味でのほかのすそのというか、大学だけじゃなくて、その下の部分の教育への効果というのもあろうと。それから、学生によって、塾とか、家庭教師の供給というのも、学生街ですから、安価に行われることとなります。そういう意味で、現在やっております学習塾のバウチャーとの相乗効果というのが期待できようというふうに思います。そして、あいりん地区に限ったお話で、今のは西成区全体のお話でございますが、あいりん地区に限っても、生活保護受給者とか、日雇い労働者、あるいは、野宿の方もまだまだいらっしゃいますが、そういう方への仕事づくりという意味でも、一定の貢献ができようかと思えます。つまり、大学みたいなものがありますと、清掃はしなきゃいけません。それから、ビルメンテナンス、そして、建設需要自体もここにあるということでございますので、こういう副次的な効果もあろうと、そして、5番目でございますけれども、これから、議論していきますが、アートとか、若者文化の発

信地にこの西成区というのがなれないかということをやっと議論しようと思っておりますが、そういうことを議論する上でも、学生が多いということは、その発信地としての候補になり得ますよね。そういう意味で相乗効果が期待できると、そして、若いアルバイト労働力が、学生は期待できますので、飲食店とか、娯楽施設の活性化ということも、労働力としての期待もできようと、そして、何よりも、学生というのは、偏見というのはちょっと強い言葉ですけども、このまちへの抵抗感というのは余りない人たちですので、そういう人がどんどん入ってくるということによって、いろいろ負のイメージを持たれている部分が大分解消していくだろうと、そして、もう一つ期待できるのは、学生はここに住んで、この地域のよさを知ってくれるわけですけども、やがてこういう人たちは、大人になりますので、子育て世帯として定住して来たり、あるいは、別の地域に行っても、また、戻ってきてくれるというようなことで、そういう人口構成が非常に若返るというようなことが期待できようかというふうに思います。

じゃ、そんなことを言うわけだけでも、候補地はどこにあるんだいということでございますけれども、1、2と書きましたが、2はちょっと難しいと思いますので、主に1というところを考えております。1は新今宮の北側の恵美須西3丁目ということなんですが、具体的にどこのことかと申しますと、これが、ここですね。これが新今宮駅ですけども、この北側の広大なエリアでございまして、ここずっと、何か、浪速警察署が、昔建てかえのときに使ったということを聞いておりますが、それ以降、ずっと空き地になっております。こっちがフェスティバルゲートですね。この広大なエリアを使ってはどうかと、大学だけじゃなくて、もちろん、ほかのものも、病院とか、いろいろ考えられると思いますけれども、1つ、候補地としてはここがあらうかというふうに思います。

もう一つ、これに匹敵するような市の未利用地がどこにあるかと探してみたんですが、1つはここですね。津守ですね。西成の一番はじっこになっちゃいますけれども、道路を渡ると大正ですけども、この津守2丁目の土地というのが、これ、大きくあいているんですね。道路がありますけれど、道路を挟んで、こちら側も市の未利用地ですので、ここも何か大きなものを考えるのに当たっては候補地になり得るのかなと、こことここですね。2丁目と4丁目とある、この下まであるんですけども、かなり広大なエリアです。が候補地になり得るかなと思っておりますが、しかし、ちょっと、利便性という意味では大分低いエリアなので、主に1が考えられるんじゃないかというふうに思います。

ごめんなさい、上ですと、新今宮の駅のもう目の前ですので、単なる大学というよりは、

もう一つ、社会人向けの大学院設置、ビジネススクールとか、グローバル教育などの、というようなものも考えられようかというふうに思いますので、採算性はこちらのほうが高いだろうというふうに思います。

どんな大学、どんな学部を誘致するかということなのですが、面積的には先ほど廣大だとは言いましたが、かといって、大学1つぽんと持ってくるというほどの大きさではありません。ですから、せいぜい1つか2つの学部を誘致するというようなことになろう、分校というか、なろうかと思えます。場所がいいので、大学院ということは考えられます。

じゃ、どういう大学を呼べる可能性があるかということですが、この市のプロジェクトという意味では大阪市立大学というのが一番やりやすいというか、可能性が高いわけですね。ですから、大阪市立大学の新学部ということは1つの方法だと思えます。もしくは今、議論されておりますけれども、大阪市立大学と府立大学の統合ということが議論されておりますが、それに伴う目玉として、学部設置ということも考えられようかと思えます。

当然、合併ということになりますと、語学の教員の方々とか、そういう方々を大分重なって、余剰人員というようなことも対策ということも考えないといけませんけれども、そういう意味で、新学部ということは現実的な選択肢になるんじゃないかと。そして、そういう公立という発想を全部あきらめても、私立大学の学部設置ということも考えられようかと思えます。ただ、私立大学の場合には、本校が別なところにありますので、あんまり遠いところだと、今度、教養課程を全然別なところに行かなきゃいけないとかいう意味で現実的ではないと思えますので、近い私立ということになろうかと思えます。

学部ですけれども、昔からこの大学誘致という話はあちこち、議論がありまして、大体は福祉学部がいいんじゃないかというような結論が得られているところが多いんですけども、私も昔福祉学科、教育学部の福祉学科というところで教えていたことがあるんですが、相当、福祉学部というのは、特に学生集めが非常に厳しいので、非常にあいりんという地域が抱えているという意味で福祉学部というのも、非常にポテンシャルとしては意味があろうかと思えますが、採算性という意味ではちょっと厳しいかなというイメージは持っております。

一方で、私がちょっと、今日、ご提案、いろいろある候補のもちろん1つなのですが、国際学部はどうかと、国際教養学部というのは、採算性とか、外部波及効果の意味で非常に大きいので、これはどうかなというふうに考えております。後ほど議論させていた

できればと思います。

ただ、その前回のソーシャルファームの話と同じで、別にソフトを我々が考える必要はないので、最終的には、大阪市が未利用地を定期借地とか、そういう形で提供して、内容はいろんなもののコンペがいいんであって、一番いいものを選ぶと、一番ポテンシャルが高いものを選ぶということで、多分、やり方としてはいいだろうと思いますが、一例、今日の議論をもう少し具体的なイメージを持っていただくための一例としまして、国際教養学部ということ、誘致する場合のシミュレーションということをしてみたいというふうに思います。

国際教養学部というのは、具体的なイメージとしましては、私は秋田にあります国際教養大学、A I Uというのがあるんですけども、これをちょっとイメージしております。大体規模的にも非常に近いので、イメージをしております。ついこの間、7月15日の日経新聞の記事で、主要企業の人事のトップにどの大学が注目しているかと尋ねたところ、断トツのトップになったのが、この秋田県の国際教養大学ということで、その次が東大で、その次が、立命館のアジア太平洋大学、A P Uですね、ということですけども、非常にやっぱり、国際性の大学ということは、注目度が今高くて、非常に学生もたくさん集まっているというものです。特徴は何かというと、授業は全部英語だということですね。そして、週20時間程度の英語集中プログラムがありまして、これ、修了すると1年間の海外留学が義務づけられるというような、非常に日本の大学とは思えないようなことをやっておるわけですね。

そして、入試もちょっと特徴的で、四六時中入試やっていると、それから、地元の優遇というのもやってまして、秋田県の場合には少し、グレードというか、スコアが低くても入れるような、そういう措置をしておりますので、この地域への優遇ということは考えられるかと思えます。それから、非常に少人数のクラスで、そして、全寮制というのはちょっとまねができないかもしれませんが、全寮制なんですね。そして、グローバル教育の専門職大学院も設置しているというようなものです。

立命館のA P Uも同様ですけども、とにかく、人気が抜群であると。そして、国際性ということになりますと、最初の第3回で議論したように、ゲストハウスエリアの国際観光とか、そういう意味でも親和性が高いと。もともと、この地域は国際性が高いということもあります。

そして、小中一環教育の特徴づくりとして、国際教育の推進ということも1つ候補にな

り得ると思うんですけれども、そういう意味で、国際学部が近くにあると、そして、そことの交流をできるということになりますと、非常に、相乗効果は高いというふうに思います。そして、国際性というのは、子育て世帯にとって、今の子どもを育てている世帯にとって非常に大きな魅力ですので、子育て世帯の流入ということも、進むことが期待できます。

ちょっと、どんな大学なのかという、ちょっと見てみたいと思うんですが、実はこんな話をいろいろしていたんで、大阪市の特別顧問、私の先輩なんですけれども、阪大のアカイさんという方がおまして、彼がちょっと、国際教養大学を見てくるわと行って、見てきてくれましたので、ちょっと写真を幾つかご紹介したいと思います。これは講堂ですね。何か、木でできているんですけれども、これが図書館ですね。非常に、もう、彼は図書館が気に入ったらしくて、もう図書館の写真ばかり撮ってるんですけれども、これが、教室と、少人数教育なんで、そんなに大きな教室がなくて、本当に小さな部屋でやっている。これはライブラリーですね。これですね。これが素晴らしいと彼は言っていましたけれども、非常に大きな図書館で24時間の開放をしているということで、アメリカの大学はそうなんですけれども、非常に勉強熱心な学生が使っていると。これもライブラリーかな。ライブラリーですね。これが教室ですね。これくらいのもあんまり大きくない教室で、全部英語で教育がなされているということですね。これが、学生寮なのかな、学生寮ですかね。そんなに大きくないんですね。これも、何か、学生が自習できるようなスペースですけれども、一人一人のスペースはそんなに豪華なものではなくて、これくらいのスペースでやっているということですね。これも狭いですね。これも狭いですね。これは学生寮か、学生寮で、全寮制なんですけれども、一人一人のスペースは物すごく狭いんですね。で、ある意味、何人部屋って言ったかな、何人も一緒に住むと、ルームシェアするというような部屋で、机とベッドが一緒になっているんですね。これくらいの狭さでやっているということなので、こういうようなものを、大学の中じゃなくて、外側に学生が住めるようなスペースとして、つくるということになりますと、今の簡宿ですとか、学生アパートみたいなものも、ちょっと工夫をすれば、こういうものにも変わるんじゃないかという意味で、チャンスがあるんじゃないかと思います。ミーティングルームあります。こんな感じですね。が、国際教養大学というものでございますね。

今度、採算のシミュレーションをちょっとやってまいりました。どれくらいのお金でどれくらいのことができるかということでございますけれども、まず、学部の学生数でござ

いますけれども、1学年で200人くらいと、4学年ありますので、800人くらいを集めるということにいたします。大体これが秋田のA I Uも大体これくらいの規模なんですね。社会人の夜間の専門職大学院、場所がとにかくいいですので、100人くらいはビジネス、あるいは、国際ビジネスとか、国際グローバル何とかということで、集めることはできるだろうと考えて、200人くらいの規模を私立と公立の場合で考えてみました。これ、見ていただきますと、入学金は私立、これは立命館の場合ですけれども、立命館で20万円くらいですね。秋田の場合だと40万円くらい。学部は入学金じゃなくて、費用ですね、1年間の費用、これは私立のほうが断然高い、倍くらい高い。そして、専門職大学院は200万円くらいと、今、ビジネスコースはこれくらいとっていますので、これくらいと。それから、私学助成の場合は1人当たり17万円くらいになるんですけれども、公立の場合はどうかというと、運営交付金が交付税措置されますので、公立大学の場合には市大とか、府大とかいう場合には24万円くらい、倍くらいの交付金を実質的に大阪市の中に入ってくるということになります。

支出の項目でございますけれども、ちょっと生々しいんですけれども、人数が教授20名、准教授15名、講師10名、非常勤40名、事務職員20名、それぞれの人件費ですね。私立のほうが20%くらい高く見積もっております。そして、研究費が60万円、40万円、20万円ということですね。で計算をいたします。大学の建設費は50億円くらい、大体これくらいの規模のいろんな大学を調べましたけれども、大体50億円前後です。図書費、あるいは、図書館の設備費ですね、こういうものは15億円くらい、減価償却はちょっと少ないかもしれませんが、3%をとって、学生1人当たりの経常費用を30万円くらい考えるということにいたします。

そうしますと、もろもろ計算いたしますと、収入、私立の場合と公立の場合がありますけれども、収支をちょっと見ますと、収入が17.3億円くらい、支出が10.7億円ということで、収支差が6.6億円、私立の場合は、そうすると、黒字転換まで8年くらいでいけるということですね。公立の場合だともうちょっと時間かかります。もうちょっと時間がかかりまして、黒字転換までは17年くらいかかりますので、ちょっとそこは一工夫必要になるのかと思います。

経済効果ですね。その大学の学部を設置して、具体的にお金がこの西成区にどんどん落ちていくということになりますが、それにどれくらいの規模が考えられるのかということでございますけれども、これ、生協の学生調査をもとにいたします。食費で幾ら使ってい

るのか、住宅費で幾ら使っているのかというようなものがございすけれども、ちょっと、大阪市ではわかりませんので、全国の数字を用いております。下宿生と自宅生とございす。下宿生は8割くらいというふうに考えます。そのまちに落とす生活費が月額8.9万円、1人当たり8.9万円くらい、そして、自宅生もいますね。大学院生、大学職員、事務職員が、これは主にお昼とか、そういうところで落とす消費額としましては、月額1.8万円くらいが見込まれると、それから、大学が清掃とかビルメンテナンスなどの経常費として、まちに落とす需要は4.5億円程度、年額ですけれども、年額4.5億円程度は考えられます。

そうしますと、まちにお金が回ることによる経済効果があります。これは産業連関表というので計算するんですが、単に一時的に落ちたお金がまた所得になりまして、このまちでもう1回別のお金を、別の例えでは、ビルメンテナンス産業が直接に仕事を受けて、そこでビルメンテナンス産業の雇われている方々が所得を得て、その方々がまた、消費をするわけですね。という意味で、何回か副次的な経済効果というのがあるわけですが、それ、全部含めると、大体、17.8億円くらいの経済効果があるというふうに見込まれます。

ですので、生活保護のお金というのは大体、西成区で今400億円くらい年間経済効果がありますので、それに比べると小さいですね。20分の1くらいですけれども、しかし、そうはいっても、20分の1といっても、別に小さくはありませんので、これくらいのもは期待できると、それ以外にいろいろイメージがアップするとか、教育の効果があるとかいうことを考えると、非常に1つの目玉としては、考えられるんじゃないかというふうに思っております。

大学と留学生会館と、別な話ですけれども、一緒にやってもいいですし、別々でも構いませんし、どちらかということでもいいわけですが、私は、この留学生会館の設置というのも非常に効果は高いんじゃないかというふうに期待をしております。問題意識でございすけれども、大学誘致と同様、もちろん、留学生だって学生ですので、消費、住宅ということで、このまちに対して需要が創出されるということです。そして、留学生には地域への偏見がないと、ないと書きましたけれども、少ないといったほうがいいかもしれませんが、余らないと、私の妻も実は留学生だったんですけれども、全く、関係ないですね。

逆に、この地域の外国人への偏見も非常に少ない。他の地域ですと、留学生会館ができるという、その周りが反対する可能性もあるんですけれども、それは余らないだろうと

いうふうに想像をしております。非常に懐が深い地域だろうと、そして、外国人だということ、少し、抵抗感がある方もいらっしゃるかもしれませんが、知的で日本語ができる外国人というところが大きな特徴ですね、留学生の場合には。その流入する効果は大きいというふうに私は思います。国際ゲストハウス構想、国際観光との親和性も高い。彼ら、彼女たちに対して、アルバイトとして担い手になって、むしろ情報発信してもらおうということ、外国に対して、というようなことも期待できますし、それから、具体的に小中一貫校が打ち出している外国語教育、国際教育というのを目玉にしようということを教育委員会も考えているんですが、その具体的な担い手は余り考えられておりませんので、そういう意味で、身近にこういう方がいらっしゃるということになりますと、かなり貢献が期待できようかというふうに思います。そして、何よりも、大阪はとにかく大学が多いというのが特徴ですね。そして、留学生がすごく多いんですね。にもかかわらず、留学生会館というのはもうどこも逼迫している状況で、もう専門学校を入れると物すごい数になると思います。これはほんの一例ですけれども、私がおりました阪大で大体2,000人くらい留学生が学部でいるんですね。市大300人、府大200名近く、関大、近大、それ以外にもいっぱい大学がありますので、これくらいの規模で留学生がとにかく近くにいるということですね。それぞれ、留学生会館を持っている大学もあります。例えば、阪大ですと、300人規模くらいの留学生会館持っていて、私も実はそこ、住んでたんですけども、ところが、とにかく、学生の数に対して、大学が持っている留学生会館というのは非常にキャパシティが小さくて、例えば、阪大の場合ですと、私が住んでいたところには、1年で出ていってくれと、1年入っていいけれども、次順番だから、1年で出てくれということになるわけですけれども、それだともう、余り意味がないんですね。1年で出ていかなければいけない、4年いなければいけないのに、1年で出ていかなければいけないというのは余り意味がない。確かに安いんですけども、余り意味がないので、とにかく、自前で持っている留学生会館は全然足りないという状況です。

新今宮駅の周辺は地の利が非常にいい、どこの大学行くのにも、非常にいい、そして、とにかく、地価が安いというのが大きな特徴で、ということは賃料も安いということですね。そのうまくコーディネートすれば、留学生が集まるような、うまい工夫をすると、多く集まるエリアに多分なり得ると思うんですけども、ただ、そういうコーディネートがないというのが今の状態で、別に大規模な留学生会館を設置しなくても、うまいことやれば、それは非常に多くの学生が集まるまちになり得ると思うんですけども、でも、そ

の中心として、こういうものが1つあって、そのまちがまた、留学生が集まるような下宿になっていくというようなことの中心として留学生会館の設置というのはどうだろうかというふうに思います。

これも具体的なイメージを持っていただくために、ちょっと、モデルをご紹介しますんですけども、実はこの間、東京の国際交流会館というのを見てまいりました。結論からいうと余りモデルにならないことがわかったんですけども、でも、まあ、ちょっと、イメージを持っていただくためにご紹介をいたします。これはJASSO、昔、育英会と言っていたところですけども、今は日本学生支援機構と申しますけれども、そこが設置した大規模な留学生会館とそれから、国際会議とかをやるための国際交流拠点を合わせたセットになっている施設なんですね。東京のお台場にあります。非常に、お台場の一等地にあります。この特徴は留学生会館の利用は大学院生に限られると、知的な高度な知識を持つ国際交流というのをうたっておりますものですから、大学院生だけなんですけれども、これですね。何かすごい未来都市みたいなことになっていきますけれど、これは違います。これは未来館というやつですけど、これですね、こっち側が、これでもかなりすごいですけれども、留学生会館と、それからここが、コンベンションホールみたいになっているものですね。これもちょっと見ていただいたほうがいいですね。写真を撮ってきましたので、見ていただければと思いますけれども、これがまちの全体で、これがお台場なんですけれども、科学未来館の隣にあると、全体が国際交流村ということになっているんですね。これが具体的に国際交流館の遠景ですけども、何かすごいですね。物すごいことになっていきますね。これ、4棟あるんですけども、4棟全部留学生用の会館に、留学生が住めるスペースになっている。これが、単身者用ですね。もうほとんどマンションみたいですね。これが、家族用の棟ですね。これも単身者用ですね。単身者用、2つあるんですけども、結構、ラグジュアリーな感じで、これが、家族棟のほうですね。何か、こう、ちょっとエントランスのフロアですけども、何かすごくいい感じになって、ここまで余裕しゃくしゃくでつくる必要あるのかなと思いましたがけれども、こんな感じになっていて、これが、単身者棟なんですけれども、かなり大きな施設になっていて、1フロア30くらいの部屋があるということですね。これが単身者用の部屋ですね。これくらいの感じで、非常に余裕がある感じですね。これが家族用ですね。家族用、すさまじいですね。家族用はすさまじくて、非常に大きなスペースになっています。共用のランドリーとか、これが共用の食事ができる、食事をつくったりできるスペースになっていたり、これが、何か料理教室が

できるようなスペース、これが日本語、学生相談とか、いろんな相談を受けるんですけども、日本語教室とか、そういうことをやっているようなスペースであったりとか、それから、すごいですね、これ、スポーツジムまでであると、体育館まで持っている、バーベキューができて、これ、何か、スポーツができて、素晴らしいですね。茶室まであったりして、もうここまでいくとやり過ぎだという感じなんですけれども、こういうようなお金の支払いも日々払えるようなものになっていたり、いろいろ特徴的だったんですが、ちょっと、これはモデルにならないなとは思ったんですけれども、1つ参考にはなろうかというふうに思います。

ちょっと、続きをご紹介しますと、これが、単身者、4棟あるんですけれども、A棟というのが、留学生が3万5,000円くらい、これがお台場では、ここではちょっと高いですけども、お台場では相当安いというイメージですね。単身者用B棟というのが1万円ちょっと高くて、4万5,000円、夫婦棟、夫婦棟は余り参考になりませんが、6万5,000円とか、7万5,000円というようなことになっております。なかなか総費用とか、運営費用とか、教えてくれなかったんですけど、しつこく聞きまして、教えてもらったのはこれなんですけれども、総工費という意味では300億円くらいですね。相当なものです。では中身はこんなもんです。毎年の支出が9億円から10億円、一般競争入札で委託業務にしているんですね、管理運営とか委託業務にして、3.2億円くらいですけども、その他として光熱水費用とか、賃料がただじゃなくて、これ、東京都から借りている土地なので、払っているらしいんですね、賃料。公租公課なんかも全部含めると5億円か6億円くらいということで、それに対して収入は入居費と家賃、それから、下でコンビニエンスストアやっているんですけども、それを含めて5億円程度ということなので、経常的に5億円赤字が出ていくという状態ですね。

そのために、仕分けですね、例の事業仕分けで仕分けられちゃいまして、もうこれは廃止ということに決まっていて、まだ買い手がつかなくて、もう放置してあるという状態で、本当にもったいないことをやっているんですけれども、その前の状況、どうだったんですかという、物すごい高い競争倍率で、とにかくもう常に埋まっているという状態であったということでした。

各大学に割り振って、各大学1名とか、何名という枠をつくって、そこでもうセレクトしてもらっているんですが、常に埋まるという状態であったということでした。いろいろ見てきて、もう何か面食らっちゃいましたけれども、とにかく売れないと、もう売れない

状況で、やっぱり何かあったときに非常にこういう大きな箱ものを持っているということは恐ろしいなというのが思ったところです。それから、土地をリースでやっているの、その借料がもう何億円という単位でかかっていますので、これもちょっと、大阪で考える場合には、そこは節約できるのかなど。それから、大阪で考える場合には、この規模はもちろん、要らないなというふうに思いました。どうするかということですが、例えば、800人の規模の施設をつくるかどうかは別としまして、800人入れるようなものをつくるとしても、こんな箱ものの立派なものを考える必要はなくて、まず、土地としては大阪市の未利用地を活用するというので、賃料をこの辺の相場よりも、1、2万円安い相場のもので実現すると思います。

場所ですけれども、場所は大学誘致の候補地に先ほど上げたようなところに併設するか、萩小の跡地とか、それ以外にも利便性の高い未利用地がたくさんこれくらいの規模の建物を建てるものはたくさんありますので、それは考えられようかと思えます。ただ、箱ものを行政が管理するというのはやっぱり現実的ではないと思えますので、入札をかけて定期借地にして、民間の建設にしようというのが、現実的なんじゃないかと、行政はじゃ、何をやるんですかということですが、大学生の募集ですね、各大学にこういう留学生会館は入れますよということとか、当然、人気が出てくると、セレクトしなければいけませんので、倍率高いと、選ばなければいけませんので、その管理業務、そして、アルバイト紹介とか、イベント開催とか、アルバイト紹介というのは、語学教育とか、そういうものに貢献してもらえば、小・中学校とか、あるいは、家庭教師みたいなものを紹介するというのが考えられます。それから、生活支援、相談と、さまざまな支援体制をコーディネートするという役割に徹するということが考えられます。

そうしますと、そういうものがあるということになると、この留学生会館の周りにも留学生への住宅需要というのが増加するということが期待されると、つまり、たくさん住めば住むほど、いろいろ便利になりますので、情報も集まりますので、そういう意味で、拠点化する可能性があるんじゃないかというふうに思います。

そして、私、最近まで知らなかったんですけど、事務局に教えていただいたんですが、実は非常にいいリソースがありまして、大阪国際交流センターが近くにあるので連携というのも非常に考え、現実的な選択肢として考えられると思います。

つまり、公益財団の国際交流センターというのがありまして、天王寺の上本町で国際会議場とか、ホテルもあるんですね。それから、イベント開催などの国際交流事業とか、留

学生の生活相談、留学生の就職相談といった事業をもう既に行っているというところです。例えばその方々にこっちに出てきてもらって、同じ事業をこっちで展開してもらおうということが可能性としてあると思います。

国際交流センターも宿泊所事業をやっているんですけども、非常に少ないですね。単身型48戸、世帯が6戸ということですので、もう少し広いものを、彼らのところで持ってもらうということも考えられるというふうに思います。

経済効果でございますけれども、そして、候補地ですけども、先ほど、大学と同じ場所だというふうに言ったんですが、もう少しなんかいろいろちょっと調べてみますと、例えば、このこれは今宮のこっち側ですね。大和中央病院ありますけれども、幾つかあるんですね。この割と上のほうですけども、すみません、ちょっとさっき、持っていた地図がどっかいっちゃったので、でも、まあ、このあたりに幾つか、それくらいの規模が建てられる未利用地がありますので、また、後、資料のところを出しておきますけれども、幾つか、かなり、新今宮に近いところも考えられるということでございます。

経済効果、先ほどと同じように計算をいたしますと、波及効果を全部入れて、年間9.9億円、メンテナンス、清掃等の仕事づくりもあり得るだろうと、日本語を話せる外国人労働力として、特にゲストハウスエリア、そういうところと重ねて観光産業への貢献、あるいは、教育産業ですね、塾とかそういうものの貢献も考えられると、そして、先ほどもイメージアップという話がありましたけれども、留学生が多く集まるということであると、国際教育地区、文教地区という意味でのイメージアップもありますし、それから、いろいろ留学生面での生活雑貨、食品出店ということになりますと、アートとの親和性というか、若者とか、アートの文化との融合みたいなことも考えられようかというふうに思います。

ちょっと長くなりましたけれども、以上でございますが、ここでちょっと一たん打ち切りまして、少し議論をさせていただければというふうに思います。

どなたからでも、もしご意見がありましたらお願いいたします。

○寺川委員 今の先生のお話についてちょっと思い出したのですが、2回目の会議で、(仮称)拡大会議の話を出させていただいた際に、大学、企業の連携ということで、これらを誘致してはどうかという案が出ていました。

例えば、今言われた市大と府大の統合についても、教育機関や社会福祉部門を入れてはどうかや、企業の場合は製造業がベターだという案、また、交通利便性が高いことを活かすことや、優遇税制を含めた施策を打ったらどうか、そして国際機関の誘致を意識した開

発等々、非常に注目すべきテーマ案として結構出ていました。

そういう意味でいうと、地域のニーズとしての可能性は高いのかなと思ってお話を伺ってました。

ただ、場所は浪速区のほうになります。

○鈴木座長　そうです。

○寺川委員　そうですね。浪速区ですね。

○鈴木座長　ありがとうございます。

すみません。浪速区ですね。それ、一番重要なこと言わなかったですね。新今宮の北側はあれ、浪速区なので、浪速区とちょっと、ご相談をしなきゃいけないということになるかと思います。あその場合には。

ほかに、ご意見等々ございましたらいかがでしょうか。

○ありむら委員　大学を持ってくるということに関して、一般市民の皆さんとか、区民の皆さん、きょとんとされる方がおられるんじゃないかと思うんで、私ども、経験を少し申し上げますと、実は親和性が非常に高いということなんです。私たち再生フォーラムのほうでは、2003年ごろから、スタディツアーというのをやっておりまして、生活保護のおっちゃんたちがガイドに加わったり、まち歩きの後、懇談をしたりとか、そういうことをやりながら、相互の理解を深める。それは生きがいつくりにもなり、つながりづくりにもなるということでやり始めたんです。実はそれが双方に大変効果があります。まずどれくらいの規模でやってるかといいますと、ボランティアベースで、別に仕事を持ちながらやっていますので規模は小さいんですけど、年間で多くて34回の年もありましたね。それから、30回とか、少ない年は15回くらいありますが、学生では多いときは310名。通常200名から300名というような規模で迎え入れているんですが、専攻も福祉、社会学、経済、建築系などに加えて、国際関係学部の留学生も毎年来ます。そこから言えるのは、この西成、とりわけあいりん地域というのは、何ていうのかな、学びの泉だとでもいいですかね、そういうところがあるんですよ。これは大きな地域資源だと思うんです。何を学ぶかといいますと、学生たちにとってはキャンパスでは決して得られない、初めて目にする風景ですよ。特に、大学が郊外にある場合ではそうです。社会の奥深さとでもいいですか、それから、一人一人、生きているおっちゃんたちの生きるということの迫力、無縁状態の中でつながろうとするいろんな試みとか、いろいろ学ぶものが学際的にあるわけですよ。それから、貧困問題や都市問題が山積していることに対して果敢にそれを解決しよう

としていろんな試みがされている。それをやっている人たちの情熱とか、その解決のためにはどうしたらいいのだろうかという疑問の中で、社会政策論とか、まちづくりへの関心とか、働くということの重要さとか、あるいは、人権についても考えさせられますよね。そういったさまざまな学ぶものがあるわけですね。学びの宝庫として、といたしますか。留学生ほど深い受け止め方をする。

西成区全体を見回してみても、あいりんだけじゃなくて、同和地域もありますし、在日のところもありますし、沖縄の人たちの集住しているところもありますし、考えてみたら、本当に西成区全体がリアリティを持った学びをする宝庫だと思っています。それがこれからまちづくりの中であいりんを含め、西成区全体に大きな教育体系をつくっていく場合のすそ野部分だと私は思ってるんですよ。

そのすそ野の上に、小中一貫校があったり、今おっしゃった大学がありますし、それから、職業訓練関係も必要です。コミュニティカレッジという言葉もこれまでの回で出てきましたけれど、それであるとか、それから、アート系でもそうですね。いろいろな発信や表現をしたいというか、そういう衝動に駆られるまちでもありますから。そういったことを考えると、やっぱり、先ほどのスタディツアーのちっちゃい体験からだけでなく、大きな枠組みから言っても、これは大学を持ってくるというのは、極めていい考えだということはこの7、8年のフィールドワークの中で、私は感じています。学生は必ずそこで、モチベーションを高めていきます。レポートを書かせたらわかります。それをさらに、1回、1回の関わりでなくて、常時、つまり大学を持ってくることによって、常時そういうフィールドと向き合うことで、本当にリアリティのある勉強といいますか、そういうのができるんじゃないかと思っているんですよ。

そうやって、社会に対して人材を輩出していく。現に、全国のホームレス支援であるとか、福祉の分野だとかアートとかにかかわっている人たちは、1度は釜ヶ崎というのを登竜門という形で、そこで修行をしていっていることは紛れもない事実なわけです。だから、大学設置、ですね。

でも、もう一方、話を進めて、大事なのはそこに住んでいる人たちにとってはどうなのかということですね。住民、あいりんであれば労働者コミュニティ、あるいは、住民コミュニティに対してどう還元されていくか、還流してくるかということが大事です。そのためには、いろんな仕掛けが必要だと思います。それについても、私は楽観してまして、例えば、留学生会館にしろ、国際教養学部にしろ、それは区内のさまざまな小学校、

中学校、小中一貫校でも、高校でもいいですが、それらを学びの泉というすそ野と結ぶことによって、教育の効果が高まっていくんじゃないかなと。コミュニティを強化していく方向で働くんじゃないかなと。卒業して社会人になったら、また、西成に戻ってきて、そこで地域の力になろうという人材を大いにつくっていけないかなと私は期待しています。独特のすそ野を持つ三角形ピラミッドのてっぺんのところに新大学があるというようなイメージです。これは実感として持っていて、最初は大学を幾つか結んで、コンソーシアムみたいなふうにして随時やっていくということから入ればと思ってたんですけど、考えてみたら、鈴木先生のご提案のように、1つの学部や大学院を持ってきて、そこが常時、継続的に地域の状況に、いろんなコミュニティに向き合うという形のほうがより効果は高いかもしれないなと思っています。

○鈴木座長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○水内副座長 どうも、私も大阪市立大学の所属ですので、現状というか、大阪市の大学全体の話から始めますと、大阪市域で4年制の総合大学というのは、たしか、大阪市立大学と相愛大学だけですかね。短期大学はあるんです。4年制の大学はたしかなかったような記憶があるので、実質上はこれだけの大きな都市で大学がない都市というのも、やはりちょっと、問題はあります。その辺はトップダウン的に法律の改正で工場やとか、大学という大規模な人員を呼び込むような施設は郊外にという法律は撤廃されてますので、また引き戻すために、いろんな工夫をしていただきたいなと思っています。

その意味で、大阪市立大学は阿倍野キャンパスとして医学部があって、すぐ近くにございますけれども、メインは杉本キャンパスで、大阪市域の南の端にあるので、ある種、そういう大阪市の交通至便のところにあることは非常に大きいと思います。先ほどもありましたが、大阪府立大学の統合ということが今急ピッチで進んでおりまして、はっきり言いまして、もうトップダウンで決められたら動くしかないという状況になっております。府立大学との市大の統合の中で、大阪市、旧大阪という、大阪市域の中でどのようなものを市大で、もし、考えるのであれば、トップダウンでやっていけば、それはすぐ進むと思います。

ただ、そういう話は今のところ全くプロセスとしては、上がってはおらないと私は、今のところ情報の限りでは思っております。

それから、個人的に私も西成区に大学がないというので、大阪市大としては、西成に小

さなスペースを借りて、西成キャンパスというのをつくって、西成プラザというのをつくって、やらせていただいています。やっぱり、物すごく、ありむらさんが今言われたことが、スペース的にそういう場を提供、大学が提供できたらなという意味では非常に大きいですし、大学的にも西成にそういうものを置けるというのは、非常に評価はされています。ただ余り知られていませんので、ぜひとも、何らかの連携がとれれば、トップダウン的に今動いていますので、不可能じゃないのかなと思っています。

それから、留学生のことにつきましては、大阪市大と大阪府大は先ほど、合わせて600名くらいおられると思うんですけども、今、留学生会館って入れるのは80名くらいしかありませんので、10分の1くらいしか入れないという状況です。

大部分の学生は市街地のアパートに住んでいます。7割は中国人の方でして、最近外国人差別というのが起こってしまっていて、中国人に対する留学生の入居拒否というのがいろいろあって、僕らもこの間そういうことで相談に来られてるということがあります。また、もう一つは中国の方、特に、中国の方に限りませんが、私費留学の方々が、やはりお金の形でどうやっていくかということで、やはり、アルバイトされていて、そのアルバイト先の近くに住むという形で下宿をされておりました。実は西成区にも結構、そういう就労先の関係で西成区に留学生が住んでるというケースも、今、ございます。そういう意味で安定したやはりハウジングっていうのかな、その私費留学にはかなり切実な願いです。わたしらも、たくさんの留学生抱えていますけれども、2万円台の物件を探しにくいんですね。あるんですけども真っ暗な部屋でということ、下宿を探して、もう3万円、これで、いや、しんどいとか、2万円台で探したりもしていますので、やはり、教育、留学生呼び込むというときには、この辺は西成、この特区で力を入れることは非常に大きなメリットがあると思いますし、どっちがいいかというと、効果的にも留学生のほうが高いのかね。

そういうことをやっていただいたほうがいいんじゃないかなというふうには思っております。

国際交流センターのアイハウス、もともと大阪外大の敷地の跡地にあって、そこはちょっと、ホテルと一緒に合わせて経営されたので、ちょっと小さなキャパしか持っておらず、あそこも、今、どういう形にするかと模索をされているところでございます。僕らもおつき合い、物すごくあるところですけども、まあ、何らかのお声かけをいただいてやっていければ、1つの芽が出てくるんじゃないかなとは思っております。

○鈴木座長 はい、ありがとうございます。

ほかにございますか。

○織田委員 先ほどありむら委員が言ったような、外からの見学者が来られる学生さん、もしくは研究者の方々のフィールドワークを行っているので、様々な状況を知っていただける場としてはとっても意義のある地域と考えていますが、ただ、大学誘致が出来るか心配です。先ほどから言われている経済効果以上に、大学が来てほしいという希望はありません。

来てもらって、現場を見ながらいろいろ学ぶというのは、もう間違いなく成果は上がると思いますが、ただ、先ほど言われた市大、府大というところが誘致されるというのであれば、現実味があるのかなと思うのですが、私学の誘致に関しては、よほどいろいろと手を打っていかないとすぐには難しいかなというような印象を受けます。

○鈴木座長 そうですね。私大の場合には、これ、分校になりますので、ほかの教養課程とか、ほかの教育を別ところでやらなきゃいけないので、行ったり来たりしなきゃいけないんですよね。だから、そういう意味でやっぱり、現実として、例えば、立命館が出てくるとかでは不可能だと思いますので、そういう意味でも、ちょっと、候補は限られますね。帝塚山とか、阪南とか、幾つかになるとは思いますけれども、ただ、やっぱり土地を持っているというのは、相当強い、なので土地を提供するということで、採算が合うというふうに弾いてくるのは、むしろ、公立よりも私立のほうがそういうそろばんは立つと思うんですね。

だから、私大の可能性も別に排除する必要はない。でも、まあ、市大、府大がやっぱり一番可能性としては、私も現実的だと思いますし、それは、市長がやる気になれば、かなり動くところでもありますので、少し、幾つか可能性も含めて検討してみたらいいんじゃないかなと思います。

○水内副座長 受け皿としての可能性として、大学コンソーシアム大阪というのがあって、幾つか大学がお金を出し合って、今は駅前第2ビルの4階ですかね、大学コンソーシアムさんというのはございます。それから、南大阪地域大学コンソーシアムというのは、堺市の中百舌鳥のさかい新事業創造センターの中に持っておられて、一応、単独のビルで持っているのは京都の大学コンソーシアムが持っておられまして、そこで授業をしたり、いろんなことをやっていますけれども、大学コンソーシアムさんというのは1つ、あるかとは思っています。

○鈴木座長 ありがとうございます。

○寺川委員 あと留学生に関して、箕面で留学生のハウジングについての調査をしたことがあったんですけど、やはり、そこで出てきたのは、住まい、ハウジングが留学生のニーズとうまくマッチングしてないということがわかりました。今あるこの地域の機能をうまくもっていくことが重要です。

オーナー側にとっても、外国人の留学生に貸しにくいとか、そういうハードルあるんです。実はそのハードルを少し越えるだけで、かなりニーズはあるという結果が出てきました。従ってこの特区では、地域のストックをどう活用するかという意味でのハウジングとか、そういう場所のつくり方によって新しい展開を生み出す可能性が非常に高いんじゃないかなと感じました。

○水内副座長 大阪にもし留学生の話をやるときに、一番我々、留学生受けて入れて大変な仕事というのはビザをとりに行ったり、入国管理事務所を何往復くらいしにいなあかんのですよ。これ、ビザが絶対必要ですし、特に短期の滞在のときは、本当に南港に行くと、いろんな手続すると、また、こっちに来られても、在留中登録とらんとはいけませんし、それから、銀行口座開かなあかんとか、これ、全部おつき合いせなあかんのですよ。こういうことがある種、一括してやっていくサポートステーションオフィスもついたらあれば、非常に魅力的な呼びやすい環境になっていただくとお思いますので、その辺も込みでやると、結構、おもしろい良い組織ができるんじゃないかな。

○寺川委員 生活等の相談機能を求めていますよね。あと、家具つきもニーズが高いです。

○鈴木座長 大体よろしいですか。

それでは次のお話といたしまして、保育とか、子育て流入策のお話をちょっとさせていただいて、その後に、一貫校の話、前回に引き続いての話に入りたいと思います。

まず、保育のお話をしたいと思います。保育施策、子育て世帯の流入促進策についてということでございます。また、問題意識ということでございますけれども、そもそも、市長の問題意識がこの子育て世帯の流入策だということだと思っておりますから、現在、市の各局によって、いろいろアイデアを出して、いろんなものが例として上がっております。

あるいは、24年度の補正予算として、もう既に動き出しているものもございますけれども、まず、第1に、子育て世帯の市外転入者の市税等優遇ということですね。西成に来る場合には、市税を優遇するということですね。それから、もうこれ既にやっておりますけれども、学習塾へのバウチャー公布ということですね。そして、あそパー、プレパーク

赤ちゃんの駅というのを設置して、子育て世帯がいろいろ子育てしやすいようにしようということも、やりつつある段階ですね。そして、子育て層を対象とする市民活動推進施設の設置というのも、これはどこの局だったか忘れてしまったけれども、こども青少年局だったと思いますが、アイデア例として上がっております。それから、空き店舗を活用した子育て世帯向けの事業というのもやろうと、こんなことがあります。

それから、スーパー保育園ということで、多様なニーズにこたえるスーパー保育園、スーパー保育園は何かというのは、ちょっと私も中身はまだよくわかってないんですけども、幼保一体施設ということだろうなとは思っているんですけども、こういうものも上がったりしております。

ただ、いろいろ上がって、いろいろやろうとはしているんですが、いま一つ、ちょっと、対象と効果がはっきりしないというか、投網を広く打つような政策になる可能性があるんじゃないかということ、ちょっと懸念をしているところです。本気で子育て世帯の流入策を考えるのであれば、より効果的な方法があるというふうに思います。もちろん、いろんなまちの問題は、解決するということが重要なことなんですけれども、それ以外にも、本当に子育て世帯の流入策をダイレクトに考えるのであれば、いろいろほかの自治体に学んでやれることは、このさきに上がっているような項目だけじゃなくて、いろいろあり得るというふうに思います。

その最も有力な候補というのは、保育所の充実策ですね。待機児童が多い都市部では、実際に保育所が充実すると、そこに子育て世帯が集まるというようなことはよく見られることです。私も保育も専門なものですから、随分いろんな研究やっているんですけども、とにかく、大阪じゃなくて、東京とか、関東圏、横浜とか、川崎とかなりますと、本当に保育所の空きスペースが出てくる、待機児童が少なくなるのが、もう、如実にその次の子育て世帯の、その次の年の流入の多さと物すごい関係してますので、そういう意味で保育所の充実策というのは非常に大きな施策だというふうに思います。

そして、都市部でいうと、千代田区とか、本当に都心部の中央区とか、そういうところは、もう小学校を廃校しなきゃいけないというような状況にもう直面しているわけですけども、やっぱりそれは困るので、どんどん子育て世帯の流入策というの、具体的にもう東京都もドーナツ化しているような中心部ではやっていますけれども、一番大きな施策として、彼ら何をやっているかという、待機児童対策をやっていますので、保育料を非常に低くしたりして、呼び込んで、そのおかげで小学校を統廃合せずに済むようなことを具

体的にやって、もう随分たっていますので、そういう意味では、ここもそういうことは可能性としてあるんじゃないかというふうに思います。

その具体的に小・中学校にお子さんが通い始めると移動というのはなかなか難しいですよ。ですけれども、未就学児童を持つ、あるいは、これから、出産するというような若い世帯をターゲットにした施策として、この保育、保育以外でも、とにかく、この若い世代をターゲットにする施策のほうが、幅広く、子どもがいれば、全部子育て世帯というふうに考えるよりは、具体的に流入促進に恐らくなるだろうということを思います。

特に、共働きの若い世帯をターゲットにするのであれば、やっぱり利便性の高い保育施設、病児保育も含めて、そういうものの充実ですとか、それから、保育料に対する支援策というのは、かなり効果的だというふうに思います。

そして、保育料はそういうお子さんたちを呼び込むと、しんどい世帯ばかりくるんじゃないかというような懸念を時々聞くわけですが、そうとは限らないと思います。というのは、保育料というのは、A階層とB階層というのがありますけれども、これは具体的に生活保護と市民税の非課税世帯なんですけれども、これは無料なんですね。そもそも、保育料取ってません。C世帯というのが、その上ですが、所得税の非課税世帯ですが、これも非常に保育料の意味ではもう千何百円という単位ですので、そもそもほとんど取ってないです。これをタダにしても余り意味がないですね。この保育料の軽減策みたいなのを打つ場合にもうちょっと上の層ですね。Cよりもちょっと上の層を呼び込むことになりますので、しんどい人ばかり集めるということには多分ならないんだろうというふうに思います。

じゃ、西成区で待機児童対策やるということの効果は、具体的にあるんですかということなんですが、これが最新の統計でございまして、西成区の待機児童の状況なんですが、結論からいいますと、西成区というのは非常に待機児童が少ないんですね。8人しかいません。この8人もちょっと、いろいろヒアリングをさせていただくと、年度途中で急に出てきたような需要が多いので、ちゃんと申し込みを計画的にやっている世帯はこういうことはないので、ほぼゼロに近い数字なんだというふうに聞いております。

そういう意味では、非常に良好な区といえるかと思うんですが、実は周りは非常に待機児童多いですね。これが大正、天王寺、浪速、阿倍野、住之江、住吉でございましてけれども、それぞれ待機児童数は結構な人数がいますので、何か、ちょっと、地図的に見るとこの西成区というところがエアポケット的に、スコーンと少ないと。周りは結構待機児童が

いるという状況ですので、そういう意味では潜在的には西成区が非常に保育を充実するということに対する潜在的な、この流入可能性というものはあるんじゃないかというふうに思います。

それから、もう一つ、特徴的なのは何かというと、特定未入所者というふうにいいますが、これは何かといいますと、区内で申し込みをするわけですが、当たらないわけですね。3カ所、今、入所の希望を出せるんですけれども、それが、第1希望当たらなかったと、でも、ほかに空いている場所が西成区の中にはほかにあるんですよ。例えば、津守あたりで当たらなくても、岸里に来ればあるんですよといっても、それは嫌ですというふうに言う人ですね。つまり、ほかに入所可能な保育所があるにもかかわらず、ほかの特定の保育所を希望して、待機しているという人の割合が実は非常に高いですね。これが、こちら側がその特定未入所者の統計でございますけれども、周りの区はもちろん、高いですけれども、西成も84ということなので、待機児童は少ないんですけれども、特定未入所者は多い、これはちょっと、南北に結構長いということも多分関係してるとは思うんですけれども、そういう意味では少し特徴的な、こっちが少なくてこっちがすごく多いという特徴がございます。

それは、地域的な原因もちろんあると思うんですが、もう一つは、ニーズを満たす。要するに働くにせよ利用時間が、延長保育が少ないとか、そういうニーズを満たす施設が少ない可能性もあるんじゃないかなろうかというふうに、私はちょっといろいろ調べさせていただいて思いました。

というのは、これが、西成区の保育所の状況で、結構たくさん、もう細々としてますけれども、ありますが、延長保育をやっている施設が少ないという大きな特徴があるんですね。これ、19時以降やっているのは、この黄色にしていますけれども、これくらいですね。ほか、ほとんど、18時半、特に、公立、こっちが公立、こっちが私立ですけど、公立のほうは、ほとんど延長保育やってない、ほとんど、それは言い過ぎですね。ごめんなさい。かなりの割合が延長保育やってないというようなことであるわけですね。

特に、やっても、わかくさとか、かなり、頑張ってやっているところでも、19時半までということなので、いろいろなご商売の方がいらっしゃいますけれども、もう少し、現実には長い時間、保育を預かるということをやっているところも多い中で、そういう延長保育なんかは少ないという特徴があります。

延長保育をやっている割合ですね。本当は人数でやればよかったんですけど、ちよっ

と時間がなかったので、計算が面倒なので、やっている園の割合ですけれども、西成は18園の中で7園しかやってないんですね。天王寺は9分の8、阿倍野は14分の11、住吉は20分の17、住之江は19分の12と、浪速9分の6と、大正は11分の6ということで、半数以上はやっているんですけど、西成だけは半数以下ですよ。3分の1くらいしかやってないという状況で、そして、延長保育の時間も少ないという、マックスでも19時半というようなことが特徴的です。

そして、休日保育も少ないと、病児、病後児保育も少ないと、夜間保育はやってないと、認定こども園もないと、公立の保育園の割合が多いと、認可外保育も非常に少なく、やっているところも、18時までしか認可外保育をやってない、ということですね。

例えば、ほかの区はどうなのかというと、例えば、住吉なんか見ると、もっと見づらくなりましたけれども、ここに丸がついているのが、延長保育をやっている園なんですけれども、22時とか、それがいいかどうかというのはもちろん、その保育の世界、児童福祉の世界ではいろいろ議論あるんですけども、利便性は高いんですね。とにかく。20時とかやっているところあります。それとか、ほかの区も見ますと、例えば、住之江見ますと、ちょっと、見づらいですけども、ちょっと、こっち大きくすると、こんな感じですね。延長保育やっているところは相当ありますし、22時とか、20時とか、割と普通にありますね。そういうような状況でございます。

そういう意味で、まだ工夫の余地あるだろうなということですね。

保育料の状況ですけれども、もともと大阪市の保育料負担というのは非常に低いんです。全国的に見ても、多分突出して低いところの1つだと思いますけれども、運営費が、これ、認可保育所ですけれども、557億円あるわけですけども、保護者負担は16%にすぎない。つまり、親御さんが保育料で払っている分は運営費の2割以下という状況ですね。これは軽減分、随分軽減しているということと、大阪市の持ち出しも多いと、持ち出しが多いのは、恐らく公立保育所の人件費だろうと、それから、加配が原因だろうというふうに想像しますけれども、軽減している分と、それから、このこっち出ている分は加配とか、あるいは、人件費分が多いだろうというふうに想像します。でも、それは別にここでは関係ないので、それはいいですけども、何がこれから、ここからいいかということ、西成区の場合をちょっと見たいんですけども、西成区の場合には、実はA階層、つまり、生活保護の世帯、それから、B階層、非課税世帯、市税の非課税の合計した保育料が無料の世帯という割合が4割くらいいております。C階層、その上のC階層という、これも保育料

が非常に少ない世帯ですけれど、それも入れると、所得税の非課税世帯は約6割という状況で、非常に突出して保育料負担が低い地域なんですね。

ですから、そもそものベースが非常に低いところにありますので、保育料、平均の保育料負担というのは月額1万円ちょっとくらいです。今、大体、西成区全体で、1,800人くらい児童が保育所にいるんですけれども、保育料、例えば、今、半減するということをやったとしても、たかが知れてるということでございまして、年間、1.2億円くらいしかかかりません。全額無料にしたとしても、2.4億円ということですから、保育料の軽減施策というのは、そんなに非現実的な話ではないだろうというふうに思います。もちろん、それをやると、児童がふえます。そもそもそのためにやるわけですけれども、児童がふえたとしても、恐らくそんなに何十億円かかるとかいう単位ではなくて、たかが1億円、2億円、3億円とか、その程度しか多分ふえないと思いますので、そういう意味では、ほかの施策と比べても、対費用効果が、この保育料の支援策というのは高い可能性があるんじゃないかということです。

具体的に、どういうやり方をとるかということですが、もちろん、保育料をもっと軽減しちゃうというのは1つの手なんですけれども、そうすると、他区とのすり合わせとか、いろんな問題がありますので、私が提案したいのは、保育バウチャーによって、同じことをやったらどうかということでございます。これは学習塾のバウチャーで急激に大阪ではバウチャーという言葉が知られておりますけれども、一種の切符ですよ。地域振興券みたいな感じのそういうお金ではないんですけれども、一種の券でそれを保育所に持っていくと、保育料を払ったことになるわけですね。保育所はそれを市に持って行って換金すると、そういうものをバウチャーというふうに呼びます。

結論としては子育て世帯を呼び込むためには、既存の保育施設がもっと利便性を高くして、いろんなニーズに合うような、サービス供給を行う努力が必要で、まだ、その余地は西成区の場合はどうもありそうだと、ですから、待機児童ゼロにするどころか、もう空き定員が発生するくらい感じにして、どんどん入れますよということにして、なおかつ、保育料も他区より低いですよということをする、具体的に子育て世帯を呼び込める可能性があると思うんですけれども、それは対費用効果で見て、そんなに悪くないと、先ほどちょっと、繰り返しですけれども月額1万円とか、1万5,000円くらいの保育バウチャーを交付してはどうかと、これは保育だけじゃなくていいと思うんです。バウチャーは保育料も使えますし、幼稚園の月謝にも使えると、延長保育料にも使えると、病児、病後児保

育にも使える、認可外にも使えると、休日保育にも使えるというように、それを受け取った親御さんがいろんなサービスに対してこのバウチャーを使えるという制度にしてはどうかと思うんですね。そうすると、何がいいのかというと、公立の保育所の中には、もう延長保育なんかやるのは嫌だということもあると思うんですね。組合なんかの関係で。でも、それは別に無理やり公立保育所にやらせなくてもいいわけです。延長保育をやるのが得になるような制度にすることによって、民間参入がもっと入ってきたりとか、あるいは、既存の私立の保育所がもっと延長保育をやる、あるいは、休日保育をやるというようなことになりますので、そのバウチャーを使って、それを使うとむしろ、もうかるようにするというようなことをして、そうすると、病児、病後児保育なんかも採算性悪いものがよくなりますし、そういう意味でもっと参入を促進すると。そして、結果的にそれをやると、公立もやはり、私立が頑張っている以上、やらなきゃいけないというように競争を促すことになると、それから、幼保一体化施設というのも今、非常に注目されておりますけれども、こういうものも、親御さんのニーズが高いのであれば、幼保一体化施設をつくれば、客が集まる、お金も集まるということになれば、こういうものも促進されるだろうということになりますので、単に認可保育所だけをディスカウントすると、認可保育所に対してはもっと延長保育をやれとかいうような何かお願いをするというんじゃないくて、実際にもうそれをやったほうが得になるというような制度をつくって、そして、それは別に公立とか、認可保育所だけじゃなくても、いいわけですので、具体的にバウチャーというやり方は私はいいいんじゃないかというふうに考えておりますが、いろいろご議論があらうかと思えます。

それから、ちょっと話は変わりますが、子育て支援施設施策という意味では、学習塾のバウチャーというのが、今、やっているところですね。就学援助を受けている公立中学の1,000人が対象で、9月から3月までで今やっております。申請率は、今のところ低調です。まだ終わってませんので、これからふえる可能性はもちろんありますけれども、申請者、今、228名、応募事業者も16業者でスポーツ教室とかそういうのも期待してたんですが、それはありませんでした。これからふえるとは思いますが、余り、わあっと集まらない理由は、1つはやっぱり情報の周知徹底が不足しているということにあると思えます。もう一つは金額が1万円というのが、ちょっと中途半端なんじゃないか、つまり、塾の費用なんていう場合には、1万円じゃちょっと足りないんですね。平均2万円くらいの塾費用がかかりますので、1万円バウチャーをもらっても、もう1万円は自分で払わな

きやいけないわけですがけれども、低所得世帯はその費用負担が大きいので、結局使わないということになる可能性があるのと、そして、特に、1万円もらうのは就学援助を受けている世帯ですから、そういう意味では、ちょっと、1万円というのは、余りいい金額でなかったんでないかなという気が私はしております。

それから、制度の持続性が、この後どれだけそれが続くかわかりませんので、業者のほうも投資するわけですよ。固定費が回収できるかどうかわからないので、そういう意味でも応募が低調だというのは理解できます。

そして、事業者の選定条件もちょっと厳しいんですね。西成区内で3年以上の実績を有する事業者、それが少なかったら、西成区外も求めるということですがけれども、これも、ちょっと厳しかったんじゃないかということなので、もう少し金額を増やしたり、あるいは、固定費を補助するというようなことのために、私がちょっと提案したいのは、学校の空き教室だとか、校庭の放課後利用をもう少し認めて、その中で、塾ができると、あるいは、その中でスポーツ教室ができるというようなことにしてはどうかというふうに思います。そうすると、スペース確保する必要がありませんので、固定費がもうない状態で塾が参入できるということで、例は杉並区の和田中学校の夜スペがありますので、こういうものを一緒にやることにやれば、塾バウチャーというのが生きてくるんじゃないかというふうに思います。

ちなみに、この夜スペみたいなのは、バウチャーの話だけじゃなくて、もっとやるべきですね。西成区の小・中学校の活性策の一環としても、どんどんそこでやる、とにかく、塾をつくる場合には、大体駅前にみんなつくるわけですがけれども、わざわざ学校が終わって、駅前というのは必ずしも、治安がいい場所だけとは限らないです。そういうところまで行って、子どもが行って帰るということになるわけですよ。学校が終わって、放課後の中で、塾のほう为学校の中に入ってきてくれれば、こんなに親にとって安心な塾はありませんので、どこにも小さな子が繁華街とか行かなくても済みますので、これは非常にいいアイデアなのは、ここでも検討してはどうかというふうに思います。選定条件もちょっと緩和して、むしろ、この地域ですと、学習塾というよりは、もうちょっと、居場所づくりみたいなものを考えて、地域の実情に根差したような利用も検討してはどうかというふうに思います。

ちょっと駆け足ですみませんが、その他の流入策としては、市税の優遇というのも重要ですがけれども、子育て世帯に対する家賃補助なんていうのは、結構ほかの自治体でもやっ

ていることですので、これは考えられるだろうと、それから、子育て世帯向けの住宅の転換に関する若干の補助というのも合わせてやると、効果的かもしれないと、こんなところでございます。

以上でございます。

じゃ、どうしましょうかね。これも含めて、もう少し、これはこれだけでちょっと、少し議論して、その後に、小中の話、あるいは西成区の教育の活性策ということについて議論をしたいと思います。特に保育のあたりのところで、もし、ご意見がありましたら、いかがでしょうか。

じゃ、また、最後に戻って、そのあたり議論するとして、小中の、前回の話の続きをやりましょうか。

あ、意見ありますか。どうぞ。

○水内副座長 小中のお子様を持っている世帯と、保育、未就学世帯を持っている世帯と、地域に対するいろんな意味での学校の問題とか、考えた場合に、未就学児童の世帯のほうが入ってきやすいというふうに考えてよろしいですか、一般的には。

○鈴木座長 そうですね。私はそう思います。というのは、小学校を途中で転校するのはかなりお子さんにとって抵抗感があるんですね。でも、まだ保育園とか、幼稚園の段階だと、移れると思います。足が速い。そのかわり、そこを援助しても、小学校に移るときに、また、移っちゃうという可能性は一方ではあるかもしれませんが、それはつなぎのなるべくここに戻ってもらうようなことはちょっと考えなきゃいけないとは思いますが。

○織田委員 現実的に、小学校の校区変わるというのは、3年生くらいまでやったら、リスクは少ないと聞いていますが、高学年になるほど転校は難しくなるとのこと。だから、現実的な話になってきたら、やっぱり校区変わっていくというのは、大変かなというところですね。

未就学やったら、まだ、賃貸から家買うときに、そういう選択が出てくるでしょうけれども、持ち家の方が売ってまでというふうに考えたら、多分、難しいでしょう。

○水内副座長 そうすると、あれですか、必ずしも西成区に住んでいる方でなくて、西成以外に住んでいる方で西成区のこういう利便性のいい保育所を使うというケースももちろん、OK。

○鈴木座長 そうですね。それはOKにしておいたほうがいいと思います。徐々に徐々に入ってきてもらうというようなことでいいんじゃないかと思います。

使うといったって、それはおのずと範囲は決まりますので、その北区から来るとか、そういうことはあり得ないと思いますので。

○寺川委員 多分、ここで話をするテーマではないかもしれませんが、必ずこの話をした時に議論される点は子供を受け入れる地域の環境をどうするかがセットですよという点です。とりあえずそこだけは押さえておく必要がります。

○鈴木座長 はい。

じゃ、最後のお話に入りたいと思います。小中一貫の話は、資料は出てましたっけ、そうですね、前回、ちょっと、説明して少し中途半端だったわけでございますけれども、小中一貫校の設置ということで、これですね、ちょっとちっちゃいですがけれども、今宮中学校区における施設一体の小中一貫校の設置についてということで、これ、教育委員会につくっていただいた資料がございます。

特に西成特区ということではなくて、幾つかもう既に小中一貫校というのはやり始めているので、小中一貫校でやろうとしていることの1つであるというのが、教育委員会のご説明、特に西成特区で、だから、この今中の一貫校を独自で何か考えているというわけではないということでした。

でも、そういうものを、独自のものを考えてもいいんじゃないかなとは思いますが、萩小と弘治と今宮小を合併すると、もともと、萩小と弘治を合併するという話にその今宮小学校を加えたということですね。非常にポジティブな、つまりスーパー校をつくるんだというイメージが最近、持たれているというか、もう余り持たれてないかな、市長はそういうことを積極的なことをおっしゃっているんですが、もともとの話はこれは非常に児童数が少なくなっていて、合併せざるを得ないというところから出発しているので、そうはいつでも、そういうじり貧的な、ネガティブな話をするんじゃないかと、もうちょっと、教育をちゃんと活性化して、むしろ、小学校にもっと、小・中学校に人を呼び込むくらいのことを考えたらいんじゃないかということは今考えているということですね。

その教育の目玉ですけれども、なにわっ子の育成、これはごめんなさい、教育委員会の資料ですけれども、なにわっ子の育成と、それから、確かな学力と進路指導、特に、これは西成に限ったことではないと思いますけれども、それから、豊かな心とたくましい体の育成と、そして、登下校の安心の確保、あと、語学教育はどっかにあったような気がしたんですが、ありますね、早くから外国語活動を取り入れ、英語を学ぶ教育から、英語を使う教育にするというようなことが上げられておまして、24年で考えまして、25年、26

年に新設改修工事をしまして27年に開校すると、小中一貫校を開校すると、こういうスケジュールに今のところ考えられております。

前回の議論ですと、そういう大きな特徴と、外国語教育とか、そういうところじゃなくて、まず、もうちょっと、地に足をつけて、生活力をつけるというようなところをもう少し、この一貫校の独自の特徴としてはそういうところに置いたらどうかというような議論がなされたというふうに理解しております。

ここから、今日の議論をしたいというふうに思います。私は小中一貫校のやっぱり、前回いろいろ議論になったような、生活力をつけるとか、もっと、困難な子どもたちをちゃんと援助するようなネットワークをきちんとする、それはもう、非常に必要なことで、そういうことを売りにしても、もちろんいいですし、それはちゃんとやるべきだろうと思いますが、一方で、その主張的なものを拒否することは全然なくて、もう少し特徴的な教育ができるのであれば、それは別に排除する必要は全然ないだろうというふうに考えております。

外国語教育、先ほど冒頭の話もあったように、外国語教育は国際性というのはいろいろ相乗効果がありますので、一緒に考えていくということは1つ有力な目玉の候補になり得るというふうに思っておりますが、ほかに何かいろいろ、ご意見がもしありましたら、お願いできますでしょうか。

○水内副座長 1点確認したいんですけれども、この小中一貫校っていうのは、今も座長が言っておられるとおり、特区があるからと始まったものでなくて、その教育委員会の中で、余りに規模的に維持が不可能なレベルに達した、たまたま、それが隣接した2つの小学校があったということから、こういう議論が、少し前から始まってたと、それに今回の特区の話で、こういう話があった中で、じゃ、もう一つ、どう意義をつけていったらいいのかというお話かということと、それから、そのなにわっ子育成、ちょっと、こう今宮中学校区における小中一貫校教育とあるんですけれども、ぱっと見た限りでは、どこにでも通用するようなところがちょっと見受けられて、これに対して、この教育委員会の考え方に対して、西成特区的な意味合いをどうつけるかという議論をするという、その辺のところよろしいですか。

○鈴木座長 まさにおっしゃるとおりです。ですから、初めから特区としてこういう話があったんじゃないくて、もともとある話に、むしろ、市長が変わる前からなんですけれども、市長が変わられて、もっとポジティブにこれを押し出せないかということで、ぱんと打ち

出されたというのが、背景ですね。

そして、もともと議論があったものですから、教育委員会としてはそんなに西成特区としての味つけを多分してないんだと思うんですね。それもしづらいと思うんですね、教育委員会としては。他区との平等とか、そういう話になりますから。でも、これは西成特区の議論ですので、せっかく統合するのであれば、もっと、いろいろ特徴づけをしたらいんじゃないかという議論はここでは多分、できるんじゃないかと思いますし、そして、ごめんなさい、小中一貫だけじゃなくて、もっと、西成区全体の教育の特徴づけということをここでは少し議論をしたいと思います。

○原委員 小中一貫校の特色の話。ここの場でそれほどちゃんと深めてたわけでもなかったと思うんです。教育理念は、私は「生活力」みたいなものを打ち出すほうが、「学力の高い」みたいなことを打ち出すより、この地域に合ってるんじゃないかと思います。

生活力というのは、わりとよく教育現場で使われる言葉なんですけれども、学校教育でやっていることは、本当に世の中に出てどこまで役に立つのか、疑問なものがいっぱいあるんですよ、社会人として見れば。

たとえば、対人交渉をする力とか、プレゼンテーションをする力とか、訴えるばかりでなくて、人に配慮する力とか、あるいは作文をする力。作文だってあまりちゃんとやってないんですよ。私は文筆業なので特にいいですけど、文章書けない人が、大学生でもかなりおりますし、社会人になっても、そこで苦労する。

それから、もう一つ付け加えると、法律関係のことは、あまり学校で教えないんですよ。小・中というより高校レベルのほうに重点を置くべきかもしれませんが、法律は、世の中を渡っていく上ではとっても必要なんです。トラブル解決をどうするかという意味もあるし、極端な場合、自分がかまったらどうするかということも含めて、世の中のルール、いろんなトラブルや問題をどうやって整理して、解決していくかという法的な感覚を身につける必要がある。そういう、ある程度は具体性のある生活力の教育というのを考えていかなあかん。そういう面で特色を持った教育というのはありうるだろう。外国語に重点を置くようなことは全然矛盾はしないと思います。そういうのも、これからの世の中で生きていく力だと思います。いっぺん切りますかね。

○鈴木座長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○織田委員 3つの小学校が統合されます。子どもたちの立場に立ったら、そこに行きなさい、ですよ。学校の先生にこれをやってくださいと言われても、中々、理想のように

はいかないのではないのでしょうか。学校の先生がその理念に対して、行きたいと、ここに行ってやりたい、こういうことをやりたいというときに、その辺の配慮というところがないと、子どもたちはそこしか選べない、学校の先生もそこへ行きなさいでは、ここに書かれていることがやっぱり進まない。その仕組みがないと、提案されていても絵に描いた餅にならないか心配です。先生にこの学校で何をやりたいかをプレゼンしていただき、配置するほうが良いのではないのでしょうか。だから、熱意のある教師を集める仕組みを作らないと、理念だけで選べない方々が出会ったら、いつまでたっても進まない、そんな気がするのですが。

○鈴木座長 ありがとうございます。具体的には、教育委員会の人事の話ですね。ですから、何か、ローテーションで回って必ずしも、理念に賛同してない先生がいらっしやるんじゃないなくて、理念に賛同している先生がむしろ、行けるような、何かそういう公募なり、そういう仕組みも合わせて考えるべきだということですね。

はい、ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。理念に限らずでも、小中一貫に関して何かありましたら。

○寺川委員 例えば市による理念・方針の中に、地域とのつながりやかかわりみたいなものが書かれてあるわけですがけれども、まさに今、この地域でどういう教育をしていくかということだと思えます。この文面で見ると、「地域から学ぶ」や「かけ橋」とかっているのも、実際どうしていくのかということところが重要になります。地域も教育にかかわれる仕組みがあるとか、今は「総合的な学習の時間」がまだ残っているだけけれども、例えば、その授業を、もう少しブラッシュアップするなかで、もう少し先進的な形で展開する仕掛けがないと、いわゆる生きる力の具体的な提案にもつながらないし、そのための教育システムとしての人事の話も伝わっていかないのかなと感じます。

何かいきなり「スーパー校」が来る。というよりは、地域とどううまくつながりながらメリット（相乗効果）を生み出していくかということかな、と感じています。

○鈴木座長 地域とのかかわりというのは、ずっと教育の回では言われていることで、地域とのかかわりの中の教育というのは、もうやるべきだという話はずっとありますし、諸外国でそういう先進的な取り組みがあるわけですがけれども、なかなか日本ではそれができないという状況ですよね。だけれど、この地域はむしろ、地域が割と元気な地域なので。

○寺川委員 この間の議論の中で、（仮称）拡大会議でも小中学校の先生方にもおいでいただいたことがあり、立場上の悩ましい問題を抱えておられるだろうなというふうに思う

ことがありました。

個人的な感想ですが、保護者や地域の違い、労働者等への立場や方針の違いなど、いろんな考えを持った方がおられる中で、例えば校長先生をはじめ、先生方にとっては、だれの意見を聞きながら地域とどうつながるのかという点においてなかなかつながりにくい（対応しにくい）環境が、結果的にできてるんじゃないかなという危惧をしております。できるところで頑張っておられることは間違いがないのですが。

○鈴木座長 ほかによろしいでしょうか。

○原委員 府立西成高校の校長の山田勝治さんだったか、名前の読み方忘れちゃいましたけれども、山田校長のほうに、今日は本当はゲストで来てもらったらどうかなと思ったんですが、大阪におられないということで、メモを預かっています。簡単に内容を紹介させていただきます。

西成特区構想における教育、子育てに関するメモ。1点は小中一貫校のあり方のところなんですけど、まずハードの問題として、施設一体型でつくって本当にいいのかということをおっしゃっています。単独の校庭とか、校舎によるメリットも捨てがたいんだけど、子どもの背丈とか、大きさがずいぶん違います。

○鈴木座長 ちょっと、1点確認。

個人的な意見ということでよろしいですね。校長先生が背負っておっしゃっている意見というよりも。

○原委員 背負っているということではないです。現場で。

○鈴木座長 原さんが取材された中での、個人の意見として、ただいまおっしゃっているわけですか。

○原委員 個人レベルの意見ということで結構です。

小学校1年だと身長が115センチ、体重21キロくらい。これが中3になってくると、男の子で165センチ、体重平均55キロくらいと、ずいぶんサイズが違う。そうすると階段の高さとか、トイレの便器のサイズとか、いろんなところで差がある。もちろん机とかもそうですよね。これ、うまくやらないと、具合が悪いことが起きますよというのが1点。

それから、小中一貫校をつくるんだったら、地域コミュニティセンターみたいなものを設けたらいいんじゃないかと。ワンストップで生活相談とか、子育て相談ができるようなところを学校に置く、スクールソーシャルワーカーをそこに配置するというような、地域の子育て・教育の相談とか支援の拠点そのものを学校に置くことが役に立つんではなかる

うか。

ちょっと考えないといけないのは、学校選択制です。選択制にしてしまうと、山田先生のご意見としては、そういうものはやりにくくなるだろうと。地域と学校のかかわりというのは、いろんなところから子どもが来て入り乱れると、フォローアップがしにくいんで、導入しないほうがいいんじゃないかというご意見です。

それから、学習習慣のところ、バウチャーの話で、学校外でやる教育の機会拡大でうまく格差が解消できるかという、疑問がある。西成高校では昨年度から、1年生に算数の実力テストというのをやってみて、どの程度までできるかを試してみると、大体2ケタ掛ける2ケタの掛け算あたりから、あまりできなくなる。九九ができないわけではない。おおむね小学校3年生くらいから、家庭学習を繰り返さないといけないようなことがうまくできていない。そこはどうかという、家庭の学習環境に問題があるみたいだということですね。

西成高校でのアンケートでいうと、自分の机がない生徒が半数を超えている。学力というのは、やっぱり学習習慣によって左右されてくる。ただ、各家庭をどうやって指導するか、改善するかとなると、そう簡単ではないので、学校で補完することが大事じゃないかというご意見です。そういう意味では、夜スペみたいに学校でやる形とか、子どもの家事業とか、いきいき事業とか、家じゃないところで学習できるような形が大事という話です。といったところをお聞きしましたので、ご紹介しておきます。

○鈴木座長 ありがとうございます。

○ありむら委員 私も非常に不慣れな分野ですけれども一言。地域の方々が懸念しておられるのは、この小中一貫校に関して、最初はともかく、何年かたつとやっぱり排除されていく子どもたちが出てくるんじゃないかと。そこへの懸念ですね。

どうしてもそれがこびりついてとれないわけですね。だから、警戒心がどうしても立っていくんだと思うんですけれども。今もおっしゃったように、本当に十分に家庭での支えができてない状況の子どもたちに対して、ささえ方がなおざりにされれば排除されていく、学力的にも、居場所的にも排除されていくんでしょうから、そうした子どもたちのそういう状況に対する支えこそがスーパーなんだというような一貫校だと。スーパーという言葉を使うなら、ですが。その部分を、前回も出たかと思うんですけれども、この有識者座談会の最後のまとめの部分ではその辺のところをここはこうささえるんだというのを、やっぱりきっちり書いていただきたいなと私は思います。そうしないと、やっぱり心配です

よね。これに関してのゆくえというのは。

○鈴木座長 排除といった場合には、学校によって、学校全体、何とか小、何とか小が排除する、それとも、そうじゃなくて。

○ありむら委員 学校に行けなくなるという意味で。

○鈴木座長 はい。

○ありむら委員 その辺は、だから、いろんなパターンがあると思うんですけど、排除といっても、学校に行けなくなる。

○鈴木座長 学校に行けなくなるということですね。

○ありむら委員 学力的にも置いていかれるでしょうし。

○鈴木座長 学力的に。ああ、そういうことですか。

○ありむら委員 もう少し、そういう声を聞かないと、とでもいうか

○鈴木座長 そうですね。

○ありむら委員 地元には根強くいろんな懸念がありますので、声を聞いていかないといけないと思います。どういう形でも。

○鈴木座長 そうですね。声を聞くということも含めて考えるべきだということですね。

ほかに。そのあたりでもう少し、理念以外にも何かあれば。

○寺川委員 そういう意味でいうと、外から入ってくる子どもはスーパー校というメリットがあってここに入ってくる。先ほどの話とかぶってしまいますが、そういうときに、今言われた問題を抱えた子どもが、排除や置き去りにされてしまうのではないかという懸念、レベルの高いと言われている子どもと課題を抱えた子どもというのが分けられてしまうんじゃないかというようなことを懸念する声はありますね。

それともう一つ、教育とは直接かかわらないかもしれませんが、空間的な話も重要であると考えます。今、原さんから出ましたが、小中一貫の方向性としては、小学校の校舎を別に建てることになるんですよ。

○鈴木座長 恐らく。

○寺川委員 一棟中学校を使うということでは多分ないと思うんですが、よく議論されている点としては、現状の中学校は、かなり大きな校庭なんだけれども、小学校の子どもたち、いわゆる児童が使う使い方と中学校が使う校庭の使い方というのは違うんじゃないかということが出ています。

遊具やプールの高さの問題とかもあるし、それは何か方法を考えておられるということ

でしたけれども、その点はかなり心配されています。

それと、統合される小学校の跡地をどう使うかというところですよ。特に、萩之茶屋で意識されているのは、その跡がどうなるかによって、まちの状態とか、状況がかなり大きく変わっていくだろうと考えています。大阪市さんと話し合う場を作り、その場でやりとりをしていくので、その場でまとめていきたいという意見が出ていますね。

だから、いきなり、上から何かが決まりましたという形で出てくると問題が起こりそうです。やはり、これまでに積み重ねみたいのがあったと思います。また、あとで話があるかもしれませんが、その点は、かなりデリケートな部分であるように感じています。

あと、このエリアに学校があったから進出してこなかった業者への不安や、学校があったからこそ行政が手だてをしていたものがなくなれないかという点など、懸念されています。そういう不安を払拭し、環境整備をしてから、統合問題を考えてほしいというのが、地域のおおむねの意見ではあったかなと思います。

○鈴木座長 ありがとうございます。

○水内副座長 スーパーという言葉は、今回はどこか、公に文字で出てるんですか。何をスーパーするか、果たして、すごく、まだ議論が固まってなくて、一番極端なスーパーは進学、もう一つものでは、社会に出ても、どうとでも生きていける力をつくるというスーパーが2つ両局にあるとしたら、その辺のコンセンサスというのを、ここでいろいろと議論をしていくということになるんでしょうかね。

○鈴木座長 そうですね。スーパーという言葉を実際に使ったのは、市長のお言葉だと思うんですね。だから、割と市長の思いみたいなのはいろんなところで言われているので、出てきていると。それから、具体的に、最初の段階で、各局から出てきたものの中に小中高一貫スーパー校とかいうものがあったと思うんですね。ただ、具体的な中身はその後、何か詰まったとか、あるいは、出てきているという理解は、私はしてませんので、ここでちょっと議論をするべきだと思います。でも、余り、学力を目指してというようなだけを突出させるとかというのは、あんまり、この場ではないですね。むしろ、もうちょっと、生活力とか、そういうところを目標にすべきだということで、語学みたいなものは、一方でやってもいいですけど、だけれど、何か地元の子どもを置いていつまで、どんどん外からの子どもの学力高い子を呼んでくるということ、選択肢としてはもちろんあるとは思いますが、あんまりそういうことを考えてもしょうがないんじゃないかなというような、そんなことで、あえて余り議論はしてないということではありますけれども。

○寺川委員 市長のイメージは進学校のイメージですよ。

○鈴木座長 市長が最初おっしゃっていたのは、進学校のイメージだと思います。

○寺川委員 確認ですが、この会議では、進学校ということではないというイメージで話されているわけですね。

○鈴木座長 そうですね。その具体的に、今宮中学校と3小学校の統合というところでは、余りそういう色合いは考えてはいないということですね。ただ、将来的にもっと、何か私立の高校みたいなのが、大学もあるし、出てくるとかっていうようなことはあってもいいと思うんですね。

あと、あれですね、小中の、今宮中学校と3小学校の話もありますけれども、もう少し広げて、西成全体のその小中、あるいは高校の活性化という意味ではもう少し、また、別の色合いは考えていいと思うんですけれども、私は潜在的に非常にポテンシャルが高いのは、セレッソと大フィルをやっぱり活用しない手はないんじゃないかなということで、例えば、萩之茶屋小学校なんかでも、鼓笛隊がすごく頑張っているというのが知られているところですよ。あれも課外活動の予算というのはもう随分前に立った予算をもう少しずつ使って、今も続けているという状況なので、もうちょっと、何か、課外活動の予算を少し増やしてあげて、特徴的な鼓笛隊のように、そういうことを使えと。その中に、大フィルとかいうのも、かかわってもらおうとかというような、そういう可能性はせっかく西成区で大フィルとセレッソがあるという、そういう財産がありますので、それは考えてもいいんじゃないかなと思っはおりますけれども。

ほかに、このあたりで、何か、全体の特徴みたいなことで少し、もしご提案があればと思っはんですけれども。

○水内副座長 大学との関係でいいますと、この府市統合本部の府大市大の統合の中に、1つ、教育というキーワードになっている部分ですよ。府大のほうを福祉教育領域という学域つくろうという話があって、それから、大阪市大も教員養成の専攻をつくれという話があるんですよ。それと、この小中一貫でここと連携しながら、何かやっていく、別に附属小中学校をつくれというわけやないんですけれど、その辺のこと、絡みというのは、全然、僕も意識してなかったです。結構教育、だれを教育するのかというと、もう一つ、大阪教育大学があるのに、何でつくるのかなという形も、整理はできてないんですけれども、その辺とちょっと、これ、小・中ですから、ちょっと大学は高校なんで、ちょっと、違うんですけれども。その辺の思いをどこかで、ご確認いただいたら、大学と今の話もど

っかに接点は出るのかもしれないかなとちょっと思った次第です。

○鈴木座長 ありがとうございます。教育学部って意外にないんですよね。教育大があるんでということなのかもしれないですけども、教育学部がある大学ってちょっと、この近辺にはちょっと少ないので、そういう絡みというのも少し、検討に値するというふうに思います。

○水内副座長 だから、先ほど、要するに、教員の意味という形で、そういう新しい大学があれば、その新しい小・中が新しい方々がかかわっていかれるというのは、そんな流れみたいなんがあればなとちょっと思った次第、思いつきなんですけれどね。

○鈴木座長 あといいですか。

○ありむら委員 鈴木先生が先ほど、セレッソ大阪のことをおっしゃいましたので、私が得意な分野なんですけれど、大のサッカーファンでございまして。ただし、残念ながら、セレッソじゃなくて、ガンバ大阪なんですけれど。必ず、万博には試合を見にいらして。もちろん、セレッソも同じ大阪だし、西成区なので大いに応援しています。なぜかという、Ｊリーグが1993年にできてから、私はその理念にいわば惚れたんですよ。Ｊリーグというのは、まちづくりへの貢献を経営理念の柱に据えているんですよ。その辺はプロ野球と全然違うところでして。なので、セレッソ大阪だって当然、存立基盤のところは地域社会とか地域おこしとか、そのために、スポーツを、サッカーを活用するんだという設立の理念があるはずなんですよね。

その辺をどう具体化していくかということが、ポイントになると思うんですよ。多分、そういう構えをつくっているんだから、周辺も西成区全体も、その辺をもうちょっとセレッソのほうと話し合って、大きな何かアクションをやっていったほうがいいんじゃないかなと思いますね。

区内の小学校中学校への選手派遣とか、長居スタジアムへの各種無料招待だとか、何かいろんな相互支援事業があると思うんです。大阪市も設立当初は幾らかセレッソにお金、たしか出してましたよね。地域社会や自治体との密着度は高い球団なんですよ。西成区全体を盛り上げるためには、これは大変な財産なんです、実は。Ｊリーグのチームがあるということは。日本列島見渡したら、地元球団が欲しくて本当に皆指をくわえているような状況なので、その辺のところをもうちょっと意識して、私自身もその具体的な状況がわからないのであまり言えないんですけど、もう少し話し合えば、大きなアクションができると思いますので、その辺、研究課題にさせていただきたい、私も応援したいと思った次第

です。

○鈴木座長 ほかによろしいでしょうか。スーパー校の話、学力を目指すというのは、西成区全体という意味では幾つかそういうことを目指すような学力の底上げみたいなことをしていくということを目標にする小・中があってもいいかなということはあるので、全体として、少し考えていくべき課題かなというふうに思います。

大体、いろいろ今日、議論させていただきましたが、ほかに何か、全体を通してとか、まだ、補足的にあるとかということ、もしありましたら、よろしいですか。

それじゃ、すみません、最後ちょっと1点だけ、原さんのほうからご紹介あった校長先生ですけれども、原さんのご取材の中で、個人の意見で申し上げたというふうに、ということでもっとしていただければと思いますので、よろしくをお願いします。何か校長先生として、学校を背負っておっしゃったという意見ではないということで、一つご理解をいただければと思いますのでよろしくをお願いします。

よろしいですか。

○原委員 市長はどう反応するかを懸念されているという意味かと思いますが、教育現場の方が、自分の経験に基づいて物を言うのは当たり前のことで、首長がとやかく言うことではないと思います。

○鈴木座長 それでは、今日、長時間にわたりまして、ご意見をいただきまして、ありがとうございました。また、傍聴の方々、事務局の方々、どうもありがとうございました。

それでは、今回閉会するということにいたします。ありがとうございました。

○事務局 本日はどうもありがとうございました。次回は、8月17日金曜日午後6時からでございます。また、その次も、日程決まっております、8月21日火曜日午後6時から、同じ4階で開催させていただきます。本日は、どうもありがとうございました。